

東征による大和王権成立の過程

白崎 勝

1、大和王権成立過程の検証状況

冬十月、神武兄弟は船で日向を出発し、瀬戸内海も船で進み、河内でのナガスネ彦等との戦いを経て大和に入り、末弟の神武が即位した。記紀が記す大和王権成立の概略の過程である。この神武東征を考古学的に検証した報告は、未だ見ていない。

しかし、記紀では伊邪那岐に始まる神武の系譜を詳細に記し、その出発を当然のごとく扱っているため、出身母体の倭国の支援なしでの、勝手な行動ではなかったと思われる。現に神武が、熊野で進退窮まったときには、時を失せず二度にわたって、天照大神の遣いの高倉下や八咫鳥がやってきている。

また、邪馬台国を永く研究してきた安本美典は、多くの状況証拠を挙げ、卑弥呼の跡を継いだ台与の時代に、「邪馬台国の東遷」があったと説いている。しかし東遷の具体的な内容の研究には至っていない。

一方、考古学における大和王権成立の過程である。邪馬台国の首都と目している纏向遺跡には、急激に各地から土器が持ち込まれていて、近畿での自然発生的な邪馬台国ではない状況である。そこで、桃の種の炭素年代を根拠に、倭国乱前後に九州から移動があった、とする説に変化してきている。

以上は私が概観した、最近の大和王権成立過程の研究状況である。

2、検証方法

それでは神武東征があったとして、どのように検証すればよいのか。船で進んだ神武東征では、考古学的に検証するのは不可能に見える。これまでと方法を変える必要がある。

現在の考古学の研究方法は、帰納法である。これはAIと同じ類推の手法で、出土品の比較には力を発揮するが、古代の歴史を紡ぐには適当でない。文献や伝承、地名などあらゆる情報を駆使しなければならないと考える。

そこで論を進める方法として、仮説を用いた演繹法を採用することにした。まず前提として「正しいと考える神武東征」を設定し、この前提でもって発掘結果すべてを説明できるか検証する方法である。この時、納得いく説明ができなければ、前提は誤りであるから修正が必要である。すべて説明が可能なら前提が、正しいことになる。

3、山名に記録した弥生後期の歴史

日本には同名の山や、語尾が同じ同種の山が多くある。この同名同種の山の一部に、弥生後期のできごとが記録されていることが分かり、調査してきた。建国活動の中で、事の重要性を認識し、動くことも消えることもない山に着目し記録したのだろう。

記録方法には、つぎの四つの方法が見つまっている。

- ① **移動方角** 同名山の1文字を変えて、ベクトルの矢先としている。
- ② **移動経路** 移動中、同名の山を要所に名付けて、経路としている。
- ③ **指し示し** その時の思いを同名の山二つを結んだ先か、中間に記録している。
- ④ **重要できごとの場所** 付近に関連する山名で記録している。

次に、これらの方法で記録した、神武東征を紹介する。先に述べた「仮説・演繹法」の前提となるもので、発掘土器の移動状況などを説明する根拠である。

4、東征の進攻方向（地図1・地図2）

東征の進攻方向を、二つの高(鷹)取山を用いて記録している。地図1の奈良より西が神武東征、東は日本武尊東征である。滋賀県から福井県へ真北に伸びるベクトルは、神武東征後に行われた東国移住作戦の出発を記録している。

中国地方には出雲や高知、丹波に向かう短いベクトルが記録されていて、瀬戸内海を船で進んだのみではない行程である。

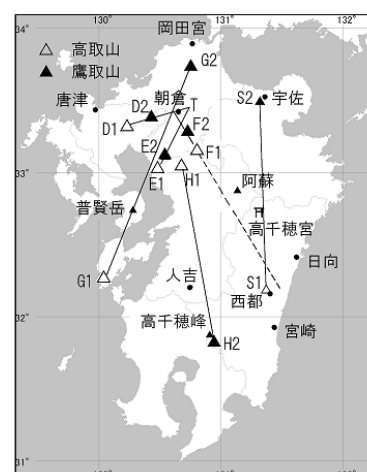
地図2は九州島内のベクトルを拡大したもので、神武東征の九州出発の状況が記録されている。朝倉市付近に三角域Tをつくるベクトルは、天草や筑紫平野の人達が、朝倉に集結した後、北九州に進んだ記録である。この三角域は邪馬台国にあった倭国の都・高天原と思われる。

ベクトルF1→F2は、神武兄弟が高千穂宮に集結した後、朝倉に進み高天原で台与こと豊受大神に、東征の開始を確認した記録である。そしてベクトルH1→H2で、神武は一旦南九州に戻り、東征の準備をして西都原を出発し、宇佐に向かったことを記録している。

東征の概要は以上であるが、次に部隊別の移動経路の記録を紹介する。



地図1



地図2

5、神武の移動経路（地図3・地図4）

神武の移動経路は、記紀以上の詳細を権現山で記録している。東征隊の大將は末弟の神武だったようで、神武のみに記録がある。高天原で東征の出発を確認した神武は、西九州各地を訪ね東征への参加を呼び掛け、熊本にも立ち寄っている。その後、日向の美々津を出発した神武は、記紀が記す岡田宮付近に権現山を名づけて、下関海峡を渡っている。



地図3

山口から出雲に向かうが、三瓶山麓まで進むと突然、方向転換し広島を経て四国に渡っている。四国は西半分を巡り、しまなみ海道を経て、また出雲に向かったが、船通山付近で引き返している。その後、丹波篠山から丹後半島の先端に足跡を記し、琵琶湖畔を経て河内から和歌山へと向かった記録である。

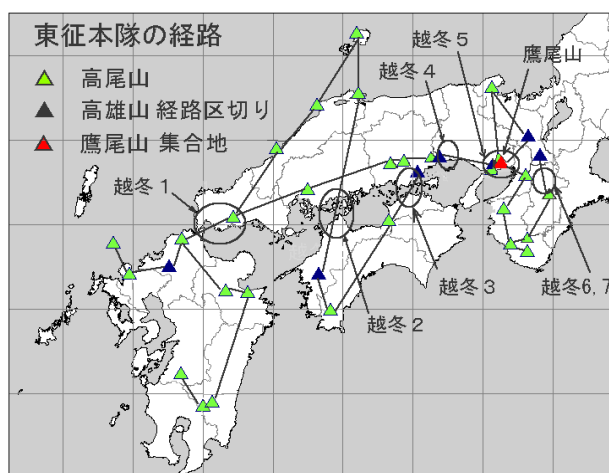


地図4

6、東征本隊の経路（地図5）

東征本隊の経路は、三種の高尾山・高雄山・鷹尾山を使って記録している。尾の文字を用いたのは、神の遣いの鳥という自負と考えた。北部九州の人たちと南九州から参加した人たちが、遠賀川河口付近で合流したことを記録している。

地図の丸で囲んだ地域は、推定した越冬地である。二年目の春、東征本隊は出雲に遠征する隊と、山陽道を真っすぐ進む本隊とに分かれている。芦屋の飛ぶ鳥の鷹を用いた鷹尾山は、各部隊の集合地につけた、特別な山名である。和歌山の田辺市付近で二つに分かれた高尾山は、中辺路を進んで本隊と、後に嵐で遭難した船隊とを記録している。



地図5

7、戦闘部隊の経路（地図6）

戦闘部隊の経路は、高城山で記録している。城の文字を用いたのは、自分たちは皆を守る城という認識と考えた。部隊の中心メンバーは狗奴国との戦いが豊富な、久留米出身の久米の人達と後に判明した。熊本・大分がスタートになっている。

山口からは一旦、出雲に向かったが神武と同様、益田付近から急遽方向転換し、四国遠征を優先している。四国復路の渡海と、越冬を備前で行い鳥取に向かっている。5年目は、丹波から舞鶴に向かっている。6年目以降は記紀に詳しく記すが、孔舎衛坂の戦いに負け、熊野越えで宇陀に向かうことになる。その熊野越えは東征本隊とは異なる経路で記録している。

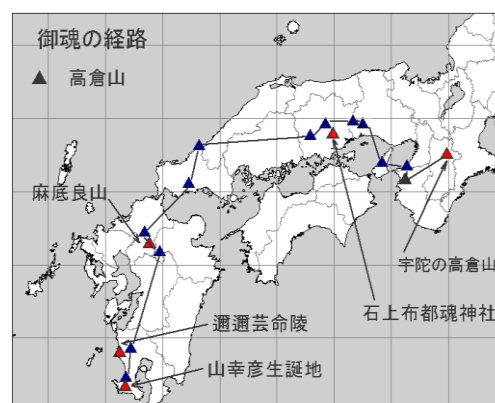


地図6

8、御魂運搬部隊の経路（地図7）

先祖の御魂を運ぶ部隊の経路を、高倉山で記録している。倉の文字を用いたのは、大事なものを守る役割の認識と考えた。

薩摩半島では、邇邇芸命の御魂を、朝倉では天照大神の御魂を背負って出発している。山口から出雲に向かったが、途中から安全な中国道を進んでいる。河内で戦いが生じたので淡路島に迂回し、竈山(かまやま)陵を経て宇陀の高倉山で終わっている。



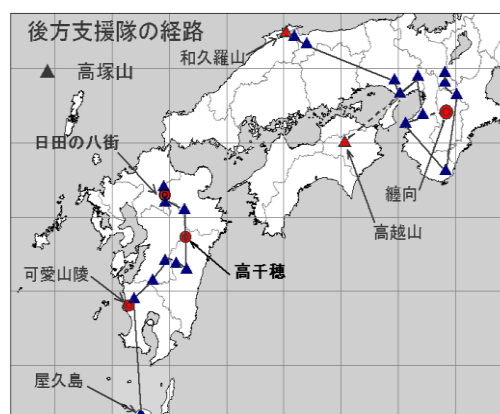
地図7

9、後方支援部隊の経路（地図8）

後方支援を担当する部隊の経路を、高塚山で記録している。塚の文字を用いたのは、戦いで亡くなったら、我々が塚をつくり葬るという認識と考えた。

九州では、御魂を背負いに行った豊受大神や御魂運搬部隊を警護し、出雲からは戦闘部隊や、神武の東征本隊を後方から支援した経路に見える。

兵庫県の高塚山が、阿波の高越山を指し示し、最後は宇治で終わっている。



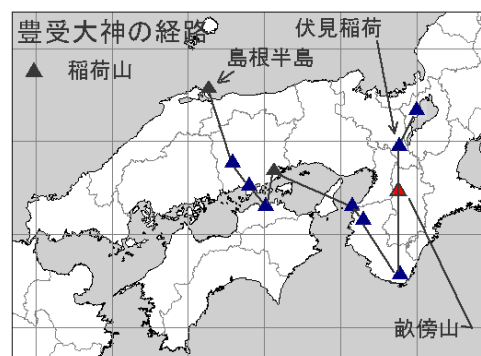
地図8

10、豊受大神の経路（地図9）

後方支援を指揮する豊受大神の経路を、稲荷山で記録している。稲荷の造語は、この東征の目的が稲作による豊かな国づくりという旗印と考えた。

南九州から出雲までは、後方支援部隊とともにやってきたが、島根からは豊受大神としての経路記録になっている。吉備と讃岐に稲荷山が多いので、ここでの活動が多々あったことがうかがえる。戦いのあった河内を迂回し、淡路を経て和歌山に入っている。

神武や東征本隊の熊野山越えと同じ、熊野越えの経路になっていて、熊野で神武の窮地を支援した記紀の記録と整合する。伏見稲荷と熊野の二つの稲荷山は南北にあり、中間に神武の橿原宮がある畝傍山を指し示している。

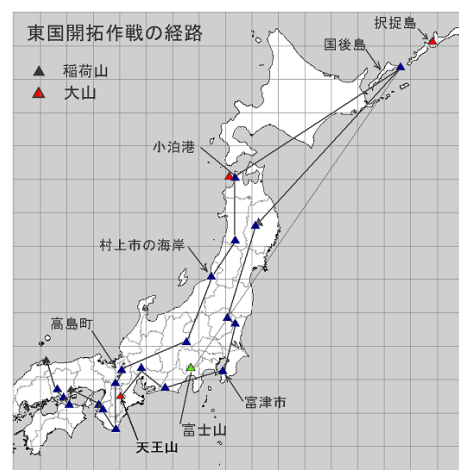


地図9

11、東国移住作戦の経路（地図10）

東征の後半に東国移住作戦があり、作戦を指揮した豊受大神の移動経路が稲荷山で記録されている。神武への王位の委譲や、御魂の引継ぎは終えていたことになる。日本海側を北上し、津軽半島の小泊から北海道に渡り、国後島の東端に稲荷山を記録している。

帰還は下北半島に上陸し岩手から中通りを南下し、富津岬に稲荷山を記録している。奈良に一旦帰還し、その後は丹後に身を引いたと思われる。



地図10

12、発掘状況の検証

以上の山に記録された神武東征を前提として、弥生終末期の遺跡の発掘状況を説明可能か検証した。その結果を東征経路順に以下報告する。

1) 最初の鹿児島県では、搬入土器に注目した。（写真1）

鹿児島県の終末期遺跡からは、各地からの多様な搬入土器が見つかっている。写真は成川式土器と呼ばれ、当時の東海地方の甕に見られる台付きの土師器である。このような台付き甕が、九州の南部一帯で見つかり注目されている。

これを考古学では、自然伝搬あるいは頒布活動と説明しているが、納得しがたい地域限定の頒布である。東征が事実で、それに参加した兵がいれば、必ず帰還兵がいる。旅をしながら帰還時に持ち帰った土器が、多様に変化したと説明できる。



写真1

2) 宮崎県では、周溝墓群に注目した。(図1)

図は宮崎県の川床遺跡の周溝墓と土坑である。周溝墓の周りに10基ほどの土坑が見つかることが多い周溝墓群である。発掘報告書では、この時代に大きさの違いなど階層性が生まれたと考察している。

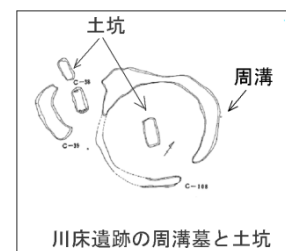


図1

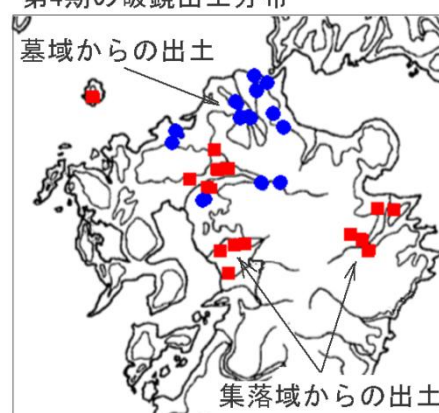
東征では同郷の人達で組織された部隊でも、上下関係が厳格に生まれ、帰還後リーダーの周溝墓を中心に、仲間が集まり土坑を築く。周溝墓自体も部隊の階級により、大きさの違いが生まれたと説明できる。

3) 熊本・大分県では、集落域出土の破鏡に注目した。(地図11)

地図は九州の終末期の破鏡の出土分布である。熊本・大分の■印は集落域出土で、北部九州の●印は墓域出土の破鏡である。■の集落域出土の破鏡は、家族の絆として、割った鏡片に穴を開け紐で首にかけていたが、激しい戦いの中で紛失したものと思われる。

豊前は船出する出征兵家族の別れの場所である。出征兵が帰還時に誰の墳墓か明らかにするため、破鏡とともに埋葬したのだろう。この破鏡の出土状況や、熊本平野からの戦闘部隊のスタートは、狗奴国との決着の戦いがあったと説明できる。

第4期の破鏡出土分布



地図11

4) 福岡平野でも、各地から搬入された土器に注目した。

福岡平野の遺跡群では、出雲をはじめ近畿の庄内式土器、東海系の土器などが出土している。これを頒布活動の結果という説明では、誰が何のために各地の土器を頒布活動したのか納得できない説である。

東征途次の補給活動の往復や、伝令の往復、東征後帰還時などに、九州へ持ち帰ったことを想定すれば状況は説明できる。

一方、考古学者は「九州の土器はほとんど畿内に入ってきていない。」と言っている。東征時に九州から持ち出した土器は、長年の移動の中で破損する。補充した土器は、煮炊き・運搬のニーズに応じて土器の形が進化し、持ち込まれたと説明できる。

5) 山口県では、改革の始まりに注目した。

(表1)

表は戦闘部隊の経路で追った、住宅の変化である。熊本・大分の、終末期の建物は、

熊本県、大分県、山口県の住居の変化

遺跡名	県名	遺構年代	遺構
二子塚遺跡	熊本県	弥生Ⅴ期	竪穴住居
高岡原遺跡	“	弥生Ⅴ期	竪穴住居
舞田原遺跡	大分県	弥生Ⅴ期	竪穴住居
高松遺跡	“	弥生Ⅴ期	竪穴住居
守岡遺跡	“	弥生Ⅴ期	竪穴住居
柳瀬遺跡	山口県	弥生後期	掘立柱建物4
奥ヶ原遺跡	“	弥生Ⅴ期	竪穴住居23 掘立柱建物1

表1

堅穴住居ばかりであるが、山口に入って「掘立柱建物」が出現している。当時進んでいた北部九州の後方支援部隊が、山口で合流したためと説明できる。

方形台状墓などの墳丘墓も、山口から始まっているように見える。

6) 複合口縁土器の成立に注目した。(写真2)

写真は弥生終末期の複合口縁壺で発掘報告書(田畑直彦)に、初源は周南市の円光寺遺跡出土の壺とある。複合口縁壺は墳墓から出土する供献用土器で、東征の新たな出発地の山口が初源であることに納得できる。



写真2

下関海峡を渡った部隊は、東征本隊の一部を除いて皆、山陰の出雲に向かうが、周防で生まれた複合口縁壺が出土する遺跡を順に追うと、国道187号経由で益田に出て、海岸線を北上し、松江から安来に続いている。その間の形態変化が遺跡毎に変化していることが分かって、後方支援部隊による活動結果と説明できる。

7) 庄内式土器の内面ケズリ技術の、発生地を追ってみた。(表2)

庄内式土器の器壁の厚みは、1~2mmの極薄である。これを可能にした技術は内面のケズリ加工にある。考古学者は出雲のケズリ加工技術を取り入れ、近畿で庄内式甕を作り上げたと説明している。

表は複合口縁式土器が山口で発生し、出雲に伝わった経路での土器の内面加工技術を調べたものである。結果、円光寺遺跡の一つ前の下右田遺跡では、ナデとケズリの両方が見られ、円光寺遺跡で複合口縁壺が発生した時点から、内面ケズリを行っていたことが分かった。

出雲への経路遺跡の複合口縁土器の内面調整

遺跡名	県名	所在地	内面調整
下右田遺跡	山口県	防府市	ケズリ ナデ
円光寺遺跡	山口県	周南市久米	ケズリ
沖場遺跡	島根県	六日市町	ケズリ
家下遺跡	島根県	益田市	ケズリ
浜客・地方遺跡	島根県	益田市	へらケズリ
高津遺跡	島根県	江津市	へらケズリ
高西遺跡	島根県	塩治遺跡	ナデ、ケズリ
古浦遺跡	島根県	鹿島町	へら掻取り
平所遺跡	島根県	松江市	へら削り

表2

8) 戦闘部隊の転回と、広島県の搬入土器との関係に注目した。(地図6)

戦闘部隊は、他の部隊とともに出雲に進んでいたが、浜田付近で突然方向を変え安芸に向かっている。そこで広島県における終末期搬入土器の搬入元を調べてみた。

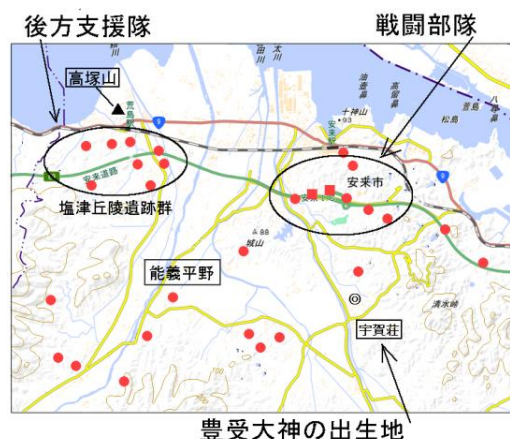
結果、周防系の土器は見つからず、山陰系土器が圧倒していることが分かった。神武や戦闘部隊の方向転回後の持ち込みと説明できる。

9) 島根県は、安来の終末期遺跡群に注目した。(地図12)

安来市にある能義(のぎ)平野の北の丘陵地には、地図のような終末期遺跡群が見ついている。中でも西側の塩津丘陵遺跡群では四隅突出型墳丘墓が多数築造されている。

これの遺跡発掘報告書では、丘陵上の弥生都市の表現もあったが、丘陵上に都市をつくる必然性が無く納得できる説明ではない。これからの戦いに備えた戦闘部隊や後方支援部隊の駐屯地の説明ならば納得できる。鳥取の青谷上寺地での戦いに備えたと考えた。

豊受大神(台与)は、安来の「根の国」を拠点とした須佐之男命の娘で、別名・宇賀之御魂とも呼ばれている。能義平野の北隅にある宇賀荘が生まれ育ったところと思われ、田畑をつぶさないよう、慣れ親しんだ丘陵上を駐屯地を選んだと説明できる。



地図 12

10) 島根県に良くみられる、四隅突出型墳丘墓に注目した。

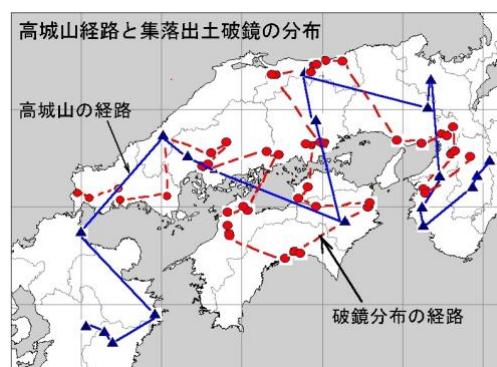
塩津丘陵遺跡群からは、複合口縁の鍵尾式土器が出土していることから、東征隊が到着して間もなく四隅突出型墳丘墓の築造にかかったことが分かる。

これは戦いに倒れた兵を葬るための準備で、台状をしたその形態は、複数の土坑を掘ることができるためと説明できる。

四隅突出型墳丘墓は西の出雲市にある西谷墳墓群でも築造されている。ここでは塩津丘陵で出土しない吉備系土器が出土していることから、四国に迂回した部隊が吉備を経て戻ってきて築造したものと説明できる。

11) 戦闘部隊経路と集落域出土の破鏡の分布が、重なることに注目した。(地図 13)

周防から大和までの集落域出土の破鏡分布を調べたところ、地図のように戦闘部隊の経路とほぼ一致した。戦闘部隊のみ、破鏡を持参していたことが分かる。



地図 13

12) 越冬と渡海の関係について注目した。(地図 5)

地図 5 は東征本隊が山陰から備後を経て、四国に渡ったベクトルである。渡海は多くの隊員の越冬を兼ねた長い冬季間の、穏やかな日を選んでの活動と思われる。三度の渡海がすべて冬季に設定した計画だったことも見えてくる。

ベクトルのように、出発地は福山の御領付近、到着地は今治の海岸で 70 km ほどになる。経路の大島の東海岸には久米の地名が残ることから、疲れた渡海の船の最後の 10 km ほどを、戦闘部隊が支援したと想像できる。

13) 愛媛県では、外来土器に注目した。

愛媛の終末期遺跡から見つかる、外来系土器を調べたところ、山陰系が大半を占めていた。庄内式も出土するが、この東征隊がやって来た時点では、庄内式土器は生まれていなので後の搬入品と思われる。

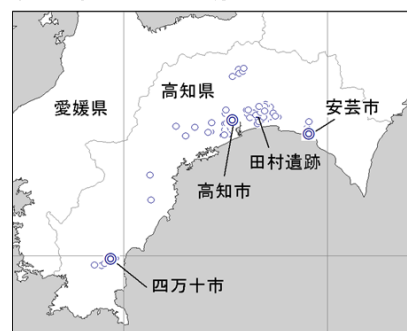
その庄内式土器と山陰からの搬入土器の時間差がわずかで、同一層から発見されると報告書にあった。東征隊は愛媛滞在から4年後には、大和入りしているのので、一層を20年ほどに想定する考古学的概念からは納得できる発掘結果である。

14) 高知県では、終末期集落の変遷に注目した。(地図 14)

南国市にある田村遺跡は、全国最大級の弥生遺跡と言われている。その田村遺跡が弥生後期後半にいたって急激に衰退し、古墳時代を待たずに消滅する。そして後期末～終末になると周辺に展開されるようになり飛躍的に増加する。

ところがまた、古墳時代初頭になると急速に消滅する運命をたどったと発掘報告書は記している。この状況は東征の開拓部隊が残留し、土佐開拓のため田村遺跡を解体、周辺に分散させた結果で、古墳時代になると居残った部隊も解散し、帰還する人も出てきて衰退に向かったと説明できる。

高知県の弥生後期の集落



地図 14

15) 徳島県では、古墳初期の積石塚が見つかることに注目した。

阿波地域は吉野川の氾濫の影響か、国生み時の開拓遺跡や、東征時の遺跡は多くない。氾濫で流されたか、泥に埋まってしまったと思われる。

河口付近丘陵には、古墳初期の突出のある積み石塚が見つかっている。発掘された遺跡状況から後方支援部隊の活動は、鳴門板野古墳群での試験的な古墳築造、土佐から戻ってくる戦闘部隊などの駐留準備、近くの若杉山の辰砂の精製などと説明できる。

16) 香川県では、高松市内の稲荷山で見つかった、双方中円墳に注目した。(図 2)

稲荷山の経路は島根半島に始まり高松に続いていることから、豊受大神が出雲から、吉備を経て四国に渡っていたことが分かる。そして、多くの改革を始めている。

吉備の楯築遺跡で試みた双方中円墳を、高松の稲荷山山頂でも再築造している。また最古の前方後円墳も登場している。さらに前方後方墳を試作したと思われる遺跡も見つかっている。後方支援部隊を指揮する豊受大神の活動の結果と説明できる。

稲荷山の双方中円墳

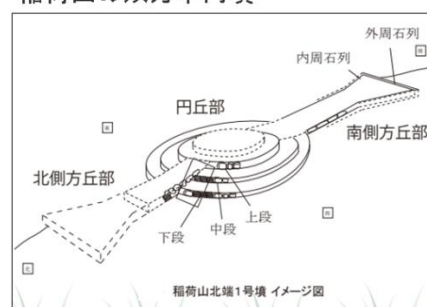


図 2

角閃石を多く含む胎土で、土器の薄肉化が、高松から始まったと発掘報告書にあった。

17) 岡山県では、備前から備中へと西に進んだ経路に注目した（地図 15）

復路の渡海は、五色台付近から備前に渡っている。戦闘部隊は上陸後、吉井川を渡り西に進み、高島付近で神武の出迎えを受け、近くの百間川付近の開拓に携わったと思われる。秋の収穫が終わると、備中を経て鳥取に向かった。

発掘報告書は、この間わずかな土器変化が備前から備中に進んでいると分析していた。



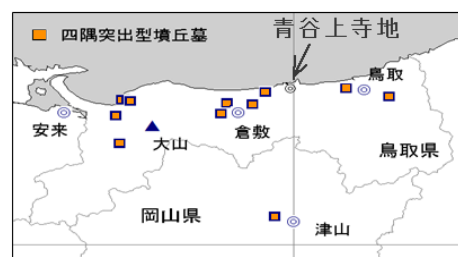
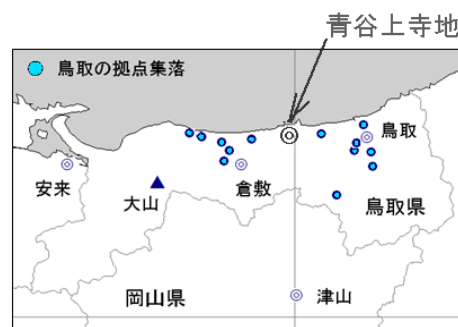
地図 15

18) 鳥取県では、青谷上寺地の戦いに注目した。（地図 16）

青谷上寺地遺跡で見つかった人骨から、外来系集団との戦いがあったことが分かっている。戦闘部隊の石見転回時点で先駆けの言向けが失敗し、戦いが確定していたと思われる。

地図では青谷上寺地を取り囲むように、鳥取と倉吉に拠点集落を築いている。亡くなった人を葬った、四隅突出型墳丘墓も両サイドに見える。

鳥取側は逃亡を防ぐため、主力の戦いは倉吉側の戦闘部隊だったことが土坑墓群から分かる。集落遺跡の中で落とし穴が見つかっている。落とし穴は備中の遺跡でも見つかっている、自分たちが落ちないように訓練していたと思われる。また、夜襲に備えた落とし穴戦術は、短期決戦でなく波状作戦をとったと説明できる。



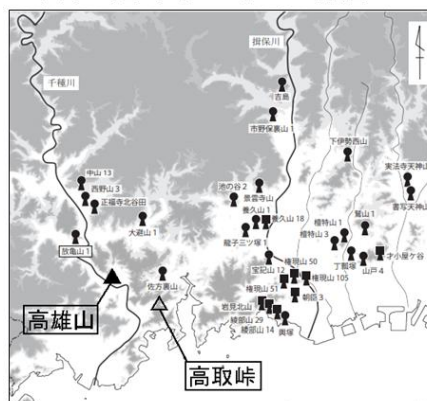
地図 16

19) 兵庫県は、播磨での4度目の越冬に注目した。（地図 17）

鳥取の戦いを終えた部隊は、雪が降る前に南下し、たつの市付近で越冬したと思われる。今年の越冬地、備中から近いので有年の地名をつけ、わずかな距離に1年を要したと嘆息が記録されている

備後の越冬地・御領でも多くの古墳が見つかったが、たつの市付近にも多くの古墳が見つかっている。越冬中に仲間同士の絆が深まり、東征後の住まいや墳墓の

4年目の越冬地・たつの付近



地図 17

行い、道を確認したうえで東征隊を先導したと説明できる。山中であるが、当時の落とし物や道中で亡くなった人の墳丘墓が見つかり、この熊野山越えは立証される可能性がある。

24) 庄内式甕の、誕生過程を追ってみた。(図3)

神武出発地の南九州の甕は、持ち帰り品で連続性はなかった。博多の西新町遺跡の出土物をスタートに、経路順に報告書から形状図を拾ってみた。すると、西新町の甕に「く」の字の口縁や、丸底の甕があり、この部分形状に連続性が認められた。

内面ケズリによる薄肉化は、周防から始まったことは先に述べた。角閃石による、さらなる薄肉化は、讃岐に始まった見解が発掘報告書にあった。最終の庄内式甕に近い「くの字」口縁のはりのある球形胴の形状は、播磨の越冬地、「たつの」で始まったように見える。出雲のケズリ技術を導入し、近畿で誕生した土器ではないことは確かである。

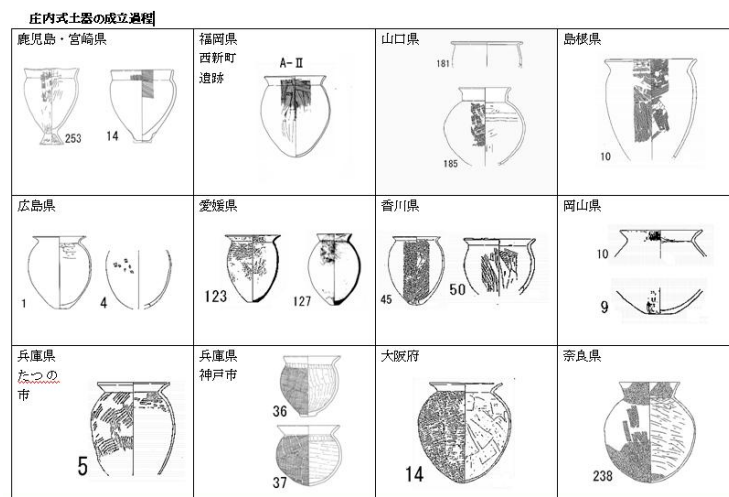


図3

25) 東国への、出発状況に注目した。(地図1)

東征隊は奈良の都づくりと分けて、東国移住者の支援作戦も行ったものと思われる。滋賀県や福井県で見つかる土器は、西部瀬戸内系が多いので、奈良に入らず直接北に進んでいたことが分かる。地図1のように北へのベクトルを記録している。

三重県の搬入土器も、近江からの搬入土器が大部分なので、太平洋側も近江経由で進んだことが分る。しかし太平洋側は平野が広いので、北陸側が先行した。

26) 東北一円で出土する、天王山式土器に注目した。(図4)

加賀・越中の搬入土器を調べたところ、西方からの土器の中に、東北系の天王山式土器があり注目した。図は天王山式土器の初期の土器名での分布状況である。(石川日出志)

北陸側が先行したので、砂山式が最も早い天王山式土器になる。この天王山式土器は移住支援部隊が、北の未開拓地に拠点を

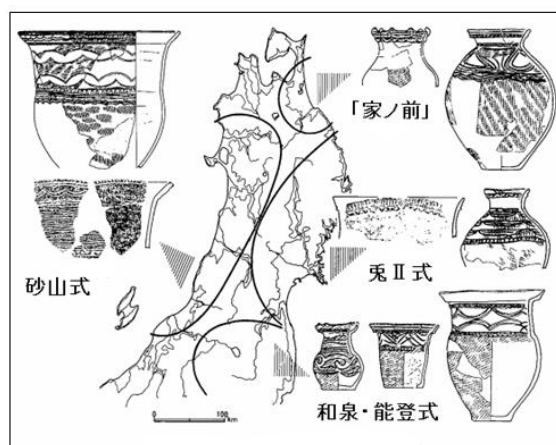


図4

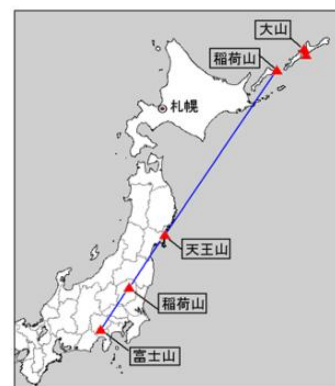
設営し、移住先情報をもって帰り、後続の移住者を北に勧誘した活動の中で広まった土器と思われる。先行した北陸での支援が一段落すると、太平洋側に移動し支援したので、天王山式土器は東国一円に広まることになった。

発掘報告書には、土器の出土状況が集落のはずれの堅穴住居からで、キャンプサイトのようなとある。支援部隊の勧誘の状況設定に合致する。

27) 豊受大神の、東国での足跡に注目した。(地図 10)

東国の稲荷山は移住作戦を激励にやってきた、豊受大神の足跡と分かる。また天王地名は東征の中で使われ始め、二代目天王の豊受大神を表している。

国後島の東の端に稲荷山が見つかる。豊受大神は津軽半島の小泊港に稲荷山を記録し、北海道に渡り国後島まで渡ったことが見えてきた。国後島の先、択捉島には祖父の大山津見神が残した大山が二山記録されていて、これを訪ねたと考えた。



地図 21

28) 富士山への、指し示しに注目した。(地図 21)

国後島の稲荷山から東那須野公園の稲荷山を結んだ、その先は富士山を指し示している。境が不明瞭な千島列島なので択捉島までが、倭国の中心にある富士山と同じ、倭国の領域という認識を記録したと解釈した。

29) 次に大和帰還と、前方後円墳の規格に注目した。(地図 22)

長野や群馬・埼玉に将軍塚と呼ばれる、大きな前方後円墳がいくつもある。旅を終え一旦、大和に帰還した豊受大神は、更なる移住が必要なことを具申したと思われる。

その答えが東国に築造された前方後円墳で大和に残っていた部隊を、まるごと移住させる方法として、古墳築造の大きさ規格を定め開拓の褒美の印としたと考える。

一方、前方後円墳より先に築造された前方後方墳が謎になっている。これは、讃岐で試作していたもので、東国開拓で先行して活躍した人のため、豊受大神が「大いなる旅」の中で許可した墳墓と思われる。

前方後方墳の分布



地図 22

このようにまとめてみると、これを神武東征と称するのは一面的で、実態は豊受大神(台与)による「大倭建国」と表現するのが適当と考える。

参考：本文には書かなかったが、東征の実年代は 270 年(寅)出発、277 年(酉)神武即位。

豊受大神の大和帰還は、東征出発後 16 年の 285 年(48 歳時)と推測している。

関連著書：たかとりが明かす日本建国 (2010 年)

岡と丘が明かす天孫降臨 (2016 年)

伊邪那美岐が明かす国生み (2018 年)

以上